

 2014年度版

目次

1. 巻頭のことば	・・・ 1
2. 2014年度 共同研究紹介	
①平和学の父ヨハン・ガルトゥング考案による 紛争転換SABONAマット法を日本の学校教育の場で 展開するための方法と開発とその効果の測定	・・・ 2
②地域社会におけるデジタル映像とフィルム文化の継承 —映画館と学校を中心に—	・・・ 3
③水中運動前後の体温変化について	・・・ 4
5. 学術交流会 開催報告	
①21世紀のアジアの共通語 ～モンゴル人言語学者の視点から～	・・・ 5
②国際コミュニケーション科 授業研究会 「大学と社会をつなぐ授業 —学生の学びをどう捉えるか—」	・・・ 6
4. 2015年度 共同研究発表会のお知らせ	・・・ 7
5. 研究所活動報告	・・・ 7
6. 参考資料：学内共同研究 公的研究費などの採択状況	・・・ 8
7. 編集後記	・・・ 8

巻頭のことば

「文は拙を以て進み、道は拙を以て成る。一の拙字に無限の意味あり」

(洪自誠『菜根譚 後集』)

いつの時代でも、世は移ろい、流行というものがある。学問の世界とて例外ではない。学者の、とりわけ日本の学者の、少なからざる部分がやや浅薄に見えるのは、流行を追っていることへの自覚を欠くからではないだろうか。もし、所謂競争的外部資金獲得が徒にトレンドを追うことを強いるものであれば、そうした「競争」への参加の活性化は必ずしも研究の質を保証するわけではない。

そのことを考えながら、本学の研究者の研究テーマを眺めてみると、トレンドな側面はあっても、決して、トレンドを追うことだけに主眼があるわけではないと分かる。

長野の清泉女学院は、反知性主義的なもの、資本集約的なもの、数の上だけのランキング競争等とは無縁の、地方唯一の女子大であり、カトリック・ミッションスクールである。その建学の精神と存在意義を肝に銘じ、流行や政治の思惑にとらわれることなく、信濃の自然と人間の営みの中で、高等教育機関における研究活動はいかにあるべきなのかを真剣に考え、不易の真理の追求を愚直に続けていかねばならない。その道も、また、「拙を以て成る」のだと思っている。

## 共同研究紹介 1

### 「平和学の父ヨハン・ガルトウング考案による 紛争転換SABONAマット法を日本の学校教育の場で 展開するための方法の開発とその効果の測定」

室井 美稚子 (清泉女学院大学 人間学部)  
寺門 正顕 ( " " )

#### 1. 研究目的

もめ事や紛争は、子どもにとっても大人にとっても頭の痛い問題である。しかし、その解決方法をしっかりと学ぶ機会是非常に少ない。

そもそもそのような解決方法が存在するのかわれがちであるが、ノルウェーの平和学者ヨハン・ガルトウング博士が考案し、わかりやすく示したスキルがある。紛争転換SABONAマット法といい、これまでに研究代表者はノルウェーやスイスなどでそのスキルを学び、研究や教育に取り入れてきた。学校でのいじめや社会での人間関係の問題を解決し、好ましい状態に転換するために、このスキルをより多くの人々に知ってもらいたいと考え、その展開方法について研究を行ってきた。



#### 2. 研究概要

・高校生や先生たちにSABONA紛争転換法のワークショップを行い、方法について検討を重ねた。

・西欧のメンタリティとは異なる文化的風土に合うような日本バージョンを開発し、計測を行うことを目的としている。また日本の学校での授業に取り入れるために、アニメの導入などで時間の短縮を図っている。



#### 3. 研究成果と今後の展望 等

##### 成果

- ・長野県内の高校などで高校生などにワークショップを行っている。
- ・依頼を受け、2012年から大阪で教員研修としてワークショップを実施している。
- ・国際会議などで成果を発表しており、2014年は平和研究者の国際大会IPRA(International Peace Research Association)がトルコで開かれ、平和教育の分科会で発表を行った。

##### 今後の展望

- ・日本のクラスサイズやカリキュラムに合った内容にすることで、小学校などの特別活動や道徳などの時間に採用してもらうよう工夫を行う。
- ・教本をより使いやすいものに刷新する。
- ・効果の計測がむずかしいので、質問紙のバージョンアップを行う。
- ・本スキルの普及のため、今後も多様な所でワークショップの開催を検討する。



## 共同研究紹介 2

### 「地域社会におけるデジタル映像とフィルム文化の継承 —映画館と学校を中心に—」

山貝 征典	(清泉女学院大学 人間学部)
芝山 豊	( " )
池田 佳代	( " )
川北 泰伸	( " )

#### 1. 研究目的

コダック、富士フィルムがフィルムの生産を中止し、東宝をはじめとする配給元も映画配給のデジタル化を決定した。大手シネコン以外の映画館もデジタル化の対応を迫られ、廃業するシアターが続出している。デジタル化はフィルムによる撮影、現像、編集技術だけでなく、劇場での映写技術をも失わせようとしている。

しかし、同時に、デジタル化はこれまでの膨大なフィルムによる映像作品や記録のアーカイブ化によって、フィルム文化の継承に大きな役割を果たしている。地域におけるフィルム文化継承の取り組みを調査し、地域社会における映像デジタル化の光と影を分析する同時に、フィルム文化継承のための活動拠点としての街中の映画館と学校の重要性を明らかにする。



#### 2. 研究の概要

##### <主な動きと活動>

3/29および4/15

シンポジウム準備会合、会の方針の協議、詳細の決定、役割分担など

6/7

「映画館のある風景2.0」映画館学会発足記念大会in長野 実施

(2014年6月8日 信濃毎日新聞掲載)

6/8

関連イベント「高田世界館への旅」映画鑑賞、フィルム映写機の見学、街歩き

10/22~10/23

全国コミュニティシネマ会議にて「映画館学」活動の周知

##### <研究成果の公表>

・NPO法人上田図書館倶楽部『環』14,15,16号 「映画館学事始1-3」を掲載

・ナノグラフィカ『街並み』43号 特集：Movie theater/映画館 へ記事掲載

・映画館学会Facebookページの開設・運営

<https://www.facebook.com/EigakanGakkai> 情報発信、相互の研究活動共有、広報

・映画館学会メーリングリストの設置：映画館学関係者との連絡や情報共有ツール

・社会情報学会(SSI)学会大会(2014年9月19日~21日、於：京都大学)にて

口頭発表：池田佳代「映画館のある風景～長野市での質問紙調査による考察～」

#### 3. 今後の展望

研究進行中の2013年11月にも、長野県茅野市の老舗映画館「新星劇場」が閉館というニュースを聞くことになった。映画館を取り巻く状況はめまぐるしく変化している。

地域のフィールドに積極的に出てゆき、映画館のある風景とはどのようなものなのか、引き続き検証や考察を深めてゆく必要がある。



## 共同研究紹介 3

### 「障害児の水中運動前後の体温変化について」

小林 敏枝（清泉女学院短期大学 幼児教育科）  
加藤 光郎（長野赤十字病院リハビリテーション科）

#### 1. 研究目的

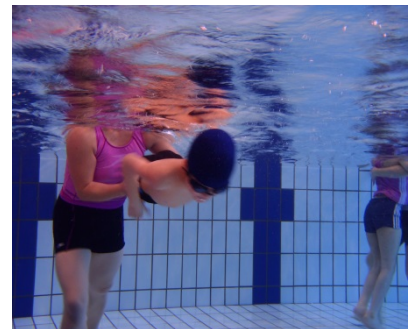
運動を行う目的は個人により様々である。生活の中で日常的に運動と関わることを通じて、仲間づくり、生きがい、健康づくり、社会参加、リハビリなどの目的が挙げられる。そして、このような効果を実感するためには「運動の継続」が重要となる。本研究は、筆者らが長年関わってきた水中運動サークルの障害のある子どもたちを対象とした。運動前後の体温測定記録をもとに、障害のある子どもたちが安全に水中運動を継続するための要因について検討するものである。

今回の被験者は脳性麻痺児・二分脊椎児である。特に二分脊椎児は、体温調節機能に障害を持つなど、障害の種類によっては「冷え」の問題もあり、水中運動を敬遠する理由にもなっている。水中運動が障害のある子どもの体温にどのように影響するかを明らかにした。



#### 2. 研究の概要及び成果

障害のある子どもたちを対象として水中運動を行う場合、児の持つ固有の条件やプール環境により、入水時間や運動内容を調整することが必要である。筆者らの先行研究では、二分脊椎児4例中3例の児に体温低下が認められた事例がある。今回の研究では、平成16～23年のデータをもとに水中運動前後の体温変化及び季節による影響について考察した。前後の体温を個別に検討すると、平均値で上昇している者は3名でありいずれも脳性麻痺児であった。低下したのは3名であった。水温は32℃と体温より低いため、直腸温は通常低下する。特に水の伝導率は空気の20倍に相当するため、短時間で体温は低下する。



しかし、水中での身体活動による熱産生が体温低下を抑制する。従って、体温低下がプラスまたは0に近いケースは、障害・低年齢にもかかわらず寒冷順化ができていたといえよう。また、季節による（5～10月と11～4月）顕著な差は今回の調査では認められなかった。さらに「H13～16年」「H16～23年」を比較すると、2名の被験者（脳性マヒ）において変化量のプラスの割合が増加しており、トレーニング効果の可能性もある。しかし、2名においては年齢と共に体温低下が進んでおり、安全域にあるものの注意が必要である。



#### 3. 今後の課題

体温に着目し水中運動の影響を検証した。児のもつ固有の条件に十分配慮しつつ、水中運動前後の体温測定はコンディショニングチェックとして簡易かつ有用である。今後は例数を増やして、障害・年齢や経験年数との関係を追跡していきたい。

# 国際学術交流会 開催報告

## 21世紀のアジアの共通語

～モンゴル人言語学者の視点から～

(2014年12月5日開催)

ジャンツァン・バトイレードゥイ先生を  
迎えて

教育文化研究所主催の国際学術交流会「21世紀のアジアの共通語 ～モンゴル人言語学者の視点から～」を、2014年12月5日（金）13時より、本学フランチスコ館3階F301教室において開催した。

講師にモンゴル国立大学からジャンツァン・バトイレードゥイ先生をお招きし、約1時間半、ご講演いただいた。

大モンゴル成立前後のモンゴル語のみならず、漢文、ペルシャ語、ラテン語など多くの言語による資料によって、モンゴルが東西文化の交流に大きな役割を果たしてきたことが示されていることや、それらの言語資料の研究史を紹介しながら、モンゴルにおける言語研究と教育の現状などを分かりやすく語られた。

質疑応答も含めてすべて英語で行われたこの講演会は、本学学生や一般市民の方にも公開された。

清泉女学院教育文化研究所 主催  
**国際学術交流会**  
**21世紀のアジアの共通語**  
～モンゴル人言語学者の視点から～

開催日時	2014年12月5日（金）13:00～16:00
開催場所	清泉女学院大学 F301教室（自由討論 8302）

**プログラム**

I. 特別公開講義（質疑応答）	13:00～14:25
休憩	
II. 自由討議	14:40～16:00

**＜講師紹介＞**  
ジャンツァン・バトイレードゥイ 先生  
Жанцангийн Бат-Ирээдүй  
(Jantsan BAT-IREEDUI)  
モンゴル国立大学モンゴル学研究所長、教授  
モンゴル国立大学出版委員会、モンゴル語学教育委員会委員

1970年、モンゴル人民共和国（現モンゴル国）バヤンホンドウ生まれ。モンゴル国立大学文学部、同大学院を修了後、エッセイで博士号（言語学）取得。1981-85年、ロンドン大学、ケンブリッジ大学、リーズ大学にて言語学、漢学、モンゴル国立大学モンゴル学研究所長。2006年より現職。大英図書、モンゴル語学教育委員会、ライプツィヒ大学中央アジア研究機関員教授を勤め、2008-2011年、東京外国語大学外国語学研究所員教授を歴任。著書、*Mongolian-English Learner's Dictionary*、2005 等のモンゴル語のラテン文字の出版地の他、*Colloquial Mongolian - New York and London*、1999年、海外で出版された著作や論文が多数あり、ブログやツイッターでの発信も積極的に行っている。

**＜テーマについて＞**  
グローバル時代の新たな大モンゴル時代。ローマ教皇の学究に留めたダウケ・ヘーンの言葉はモンゴル語の本、ラテン語訳文に、さらにはペルシャ語訳文を添えたものであったという。21世紀のグローバル社会において、母語の異なる人々が互いに理解しあうための共通言語Lingua francaとはどのようなものだろうか？  
ヨーロッパでの豊富な研究教育経験を誇るモンゴル国立大学教授バトイレードゥイ先生に、モンゴル人言語学者の視点から、各国語学教育と英語教育をめぐって様々な意見を聞かせ、21世紀のアジアにおける共通言語と共通言語についてご講演いただき、学術交流会を通して議論を深め、今後の題としたい。  
※英語による講演になります。

**＜お問い合わせ＞**  
清泉女学院 教育文化研究所（担当：吉橋・佐田）  
Tel: 028-256-1381 Fax: 028-256-6420 E-mail: koi-ko@qsc.ac.jp

京区費無料・申込み不要



バトイレードゥイ先生が講演末尾を、「現在、私たちモンゴル人研究者が国外で仕事を  
するだけでなく、外国のモンゴル人研究者が  
モンゴルに来て、自由に、研究材料を収集し、  
共同研究をすることができるようになっており、  
大学間でも、研修を含む、多くのプロ  
ジェクトが稼働しています。貴大学とモンゴ  
ル国立大学間での協力方法について意見交換  
ができることを楽しみにしております。」と  
結ばれた通り、講演後、会場を教育文化研  
究所に移し、国外の教育・研究機関との交流、  
それぞれの大学における留学生の受け入れ状  
況などについて、本学教員との熱心な情報交  
換が行われた。

海外教育研究機関との学術交流を一層活性  
化していくうえで、刺激と示唆に富む有意義  
な研究交流会となった。

## 国内学術交流会 開催報告

国際コミュニケーション科 授業研究会

「大学と社会をつなぐ授業 – 学生の学びをどう捉えるか –」

(2015年2月6日開催)

### 1. 背景

国際コミュニケーション科のビジネスコースでは、地域社会で継続的に活躍できる女性の育成を念頭に、経営学等の専門性・キャリア教育・科目間連携を意識し、授業改善を継続的に行ってきた。

今回の研究会は、授業デザインの評価と考察の機会として、科学研究費助成事業（基盤C、(課題番号：24530981「高等教育における職業実践的プロジェクトの効果を高める問題解決型学習モデルの構築」)の助成と清泉女学院教育文化研究所の後援により実現した。

### 2. 開催概要

研究会は平成27年2月6日(金)13:00～17:30に本学S206教室で開催し、学内外から約20名の参加を得た。5つの授業実践の事例紹介と、状況的学習論・活動理論、大学から企業へのトランジションを専門とする2名の指定討論者による討論を以下の通り行った。

#### <事例紹介>

- |                    |                   |
|--------------------|-------------------|
| 1) 教室で行う企業シミュレーション | 長田尚子 (清泉女学院短期大学)  |
| 2) ビジネスプランを提案する授業  | 馬場 武 (清泉女学院短期大学)  |
| 3) ゼミ活動を通じた商品開発    | 森田泰暢 (九州産業大学)     |
| 4) カフェを開業するプロジェクト  | 長田尚子 (清泉女学院短期大学)  |
| 5) フリーペーパー制作活動     | 武田るい子 (清泉女学院短期大学) |

#### <討論>

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| 1) 状況的学習論の立場から    | 香川秀太 先生 (青山学院大学) |
| 2) トランジション研究の立場から | 館野泰一 先生 (立教大学)   |

### 3. まとめ

討論では、香川先生から「ある場で学んでそれを生かす」という従来の転移論的発想を越えた見方の可能性について状況論的な立場からコメントがあった。産学連携授業を改善していく方法として、大学と社会の関係の類型化の提案と、優れた理論から実践や社会を自覚するというアプローチの可能性をご指摘いただいた。

館野先生から、トランジション研究の一環で実施された組織人3000名を対象としたアンケートの結果が紹介された。従来の実践研究では、「何を学ぶか」、「どう学ぶか」ということが語られてきたが、「だれと学ぶか」ということも、就職後のキャリア形成に関係してくることをデータで示していただいた。

短大2年間は短い、職務を通じて自立的に初期キャリアを築ける学生の養成が望まれる。当日の発表を総合的に振り返ってみると、それぞれの授業を学生自身が有機的に連携している様子がうかがえ、複数の授業での学びを双方で活かしているという学生のコメントも報告された。

今回の研究会は企画から実施まで日程的な余裕がなく、十分な調整ができなかったが、話題提供者、指定討論者含め参加者の皆様から第二回目の開催を望む声が寄せられた。



## ◆2015年度 共同研究発表会のお知らせ

共同研究の成果は、次年度に下記のように学内外に公表されます。

**2015年度  
共同研究発表会**

主催：清泉女学院 教育文化研究所

**日時**  
2015年5月27日（水）  
15：45～17：00

**会場**  
清泉女学院大学・清泉女学院短期大学  
フランシスコ館 206教室

**プログラム**

1. 開会あいさつ  
学長 芝山豊
2. 研究成果発表（各15分程度）
  - (1) 清泉女学院大学 人間学部 英語コミュニケーションコース  
教授・室井 美稚子  
「平和学の父ヨハン・ガルトゥング考案による紛争転換SABONAマツト法を  
日本の学校教育の場で展開するための方法の開発とその効果の測定」
  - (2) 清泉女学院大学 人間学部 現代コミュニケーションコース  
講師・山貝 征典  
「地域社会におけるデジタル映像とフィルム文化の継承  
- 映画館と学校を中心に -」
  - (3) 清泉女学院短期大学 幼児教育科 教授・小林 敏枝  
「水中運動前後の体温変化について」

## ◆研究支援活動

2014年度の研究所の主な取り組みは以下の通りである。

### 1. 文部科学省ガイドラインに沿った体制整備

2014年度の文部科学省「研究活動における不正行為の対応等に関するガイドライン」の改正および「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン（実施基準）」の決定により、研究機関における支援・管理体制のさらなる充実が求められることとなった。

本学においても、研究活動や研究費の執行に関する体制・制度の整備を行いホームページにて公開した。

<http://www.seisen-jc.ac.jp/effort/kenkyu.php>

### 2. 学内研究支援制度の整備・実施

①学内個人研究費の制度を見直し、従来の定額の研究費に加え、競争的資金の獲得につなげる制度として増額タイプの制度を設置し、申請者を募った。

②その他、下記の取り組みを行った。

- ・前述のガイドラインに対応した研究費取扱基準の改定
- ・公的研究費（科研費）の事務手順の改正 ・監査手順の整備 等

### 3. 研究交流の活性化

2013年度に本学研究者が取り組んだ共同研究について、「2014年度共同研究発表会」を開催したほか、本ニューズレターに掲載報告を掲載した学術交流会を実施した。2015年度においても、国内外との学術交流会の開催を進める。

①2014年度 共同研究発表会（2014年5月7日）

②21世紀のアジアの共通語～モンゴル人言語学者の視点から～

（2014年12月5日開催）

③国際コミュニケーション科 授業研究会

「大学と社会をつなぐ授業 - 学生の学びをどう捉えるか -」

（2015年2月6日開催）

## 《学内共同研究》

### ◇2014年度

所属	代表者	研究課題名
大学	室井 美稚子	平和学の父ヨハン・ガルトゥング考案による紛争転換SABONAマツト法を日本の学校教育の場で展開するための方法の開発とその効果の測定
大学	山貝 征典	地域社会におけるデジタル映像とフィルム文化の継承 - 映画館と学校を中心に -
短大	小林 敏枝	水中運動前後の体温変化について

### ◇2015年度

所属	代表者	研究課題名
大学 (継続)	室井 美稚子	平和学の父ヨハン・ガルトゥング考案による紛争転換SABONAマツト法を日本の学校教育の場で展開するための方法の開発とその効果の測定
大学	山貝 征典	信州におけるまちづくりに関する基礎的研究
大学	村中 泰子	学生の精神的健康及び適応感の変化 ～学生へのアプローチ、研究へのアプローチ～
短大	小林 敏枝	障害のある子どもの体力に関する研究

## 《外部資金申請・採択状況》

### ◇2014年度 科研費採択状況

	申請者	研究種目	課題番号	研究課題名
大学	芝山 豊	基盤(C)	26370088	聖書翻訳史から見るモンゴルのキリスト教思想
	眞栄城 和美	基盤(C)	26380962	移行期にみる子どもの自己有能感・社会的受容感の機能
短大	矢上 克己	基盤(C)	26380826	新潟県社会福祉史の総合的研究
	長田 尚子	基盤(C)	24530981	高等教育における職業実践的プロジェクトの効果 を高める問題解決型学習モデルの構築

### ◇2014年度 科研費 研究分担者

大学 :5件(3名)  
短大 :6件(4名)

### ◇2015年度 科研費等申請状況

大学 :5件(科研費)  
その他 :2件(日本学術振興会 ひらめき☆ときめきサイエンス)

## 編集後記

ニューズレターのvol.2になります。2014年度は、昨年度から引き続き、学内の研究支援制度を整備・進化させ、研究成果を学内外へ広く公開していくことと、文部科学省からのガイドラインに対応した体制を整備することが中心となりました。今後も、研究成果をより広く公開するとともに、より充実した研究支援体制を整えていくことを目指します。(教育文化研究所 事務局)

■お問い合わせ先  
清泉女学院 教育文化研究所  
〒381-0085 長野市上野2-120-8  
TEL:026-295-1301 FAX:026-295-6420

E-mail : [keiei-kenkyu@seisen-jc.ac.jp](mailto:keiei-kenkyu@seisen-jc.ac.jp)  
URL : <http://www.seisen-jc.ac.jp/>